抗日闘争の「聖地」を踏査・発掘する
―北朝鮮の中国東北地方抗日武装闘争戦跡地踏査団（1959 年）について―

水　野　直　樹

本稿は，朝鮮民主主義人民共和国が 1959 年に中国東北地方に派遣した抗日武装闘争戦跡地踏査団の実態を明らかにすることを課題としている。踏査団が派遣されたのは，1930 年代の金日成らの抗日パルチザンの歴史を跡づけ，それを目に見える形で提示するには，その舞台になった中国東北地方で資料の収集，遺物の発掘，聞き取りなどをする必要があったからである。本稿では，踏査団の構成員，行程，調査活動とその成果などを，主に当時の資料にもとづいて明らかにし，それが 1950 年代後半から 1960 年代初めにかけて北朝鮮でなされた「革命伝統」の定立に重要な役割を果たしたこと，とりわけ踏査団の成果が 1961 年に移転・開館した朝鮮革命博物館の展示に反映されたことを確認する。また，中国側で踏査団に協力した延辺朝鮮族自治州の朝鮮族幹部数名が 1960 年代前半に北朝鮮に移り住み，中には革命博物館館長など重要な地位に就いた人物もいることを明らかにすることにより，朝鮮・中国の歴史的関係の一面を垣間見る。

は　じ　め　に

本稿は，朝鮮民主主義人民共和国（以下「北朝鮮」とする）が 1959 年に中国東北地方に派遣した「抗日武装闘争戦跡地踏査団」をめぐる諸問題を明らかにすることを課題としている。

北朝鮮においては，建国の正統性を歴史的に明らかにすることが朝鮮労働党と政府にとってきわめて重要な課題であり続けた。朝鮮分断体制の中で国家としての正統性を明らかにするだけではなく，北朝鮮の内部においても現体制への支持を調達するうえで建国に至る栄光と苦難の歴史を大衆に学ばせることが必須であった。そのような中で，金日成らによる抗日パルチザンの歴史が「革命伝統」として定立されることになった。とりわけ，ここで注目したいのは，1950 年代後半から 1960 年代初めにかけて強調されることになった抗日パルチザンの歴史への認識である。

「革命伝統」の定立過程については，これまで主に北朝鮮における近現代史，革命運動史の記述の変化をたどることによって，それを明らかにしようとする研究が行なわれ

てきた[1)]。しかし，北朝鮮社会において「革命伝統」に対する認識がどのように形成され，どのような過程で確立したかについては，あまり研究がない。その点では，『抗日パルチザン参加者たちの回想記』の内容を分析した研究[2)]がなされている程度である。

しかし，大衆レベルの歴史認識を探るためには，検討すべき多くの課題が残っている。例えば，朝鮮革命博物館の変遷もその 1 つであるが，本稿では革命博物館の展示に大きな関わりをもった抗日武装闘争戦跡地の調査活動を取り上げることとする[3)]。検討・考察するのは，金日成らによる抗日武装闘争の戦跡地を調査するために，1959 年に中国東北地方に派遣された踏査団の構成や活動がどのようなものであったか，そしてその成果が「革命伝統」の歴史にどのように反映されたか，などの問題である。

金日成らの抗日武装闘争は主に中国東北地方で展開されたが，現地での調査は朝鮮の解放後，特に北朝鮮の建国以後，何度かわたって行なわれた。その中で 1959 年の踏査団はもっとも規模が大きく，「革命伝統」の定立に重要な役割を果たしたと考えられる。同じ 1959 年から刊行がはじまった『抗日パルチザン参加者たちの回想記』，そして 1961 年の朝鮮革命博物館の移転・開館に並行するものとして踏査団を位置づけることができる。

1959 年の踏査団については，比較的多くの資料が残っている。踏査団による正式の報告書が存在するかどうかは不明であるが，踏査団自身が作成した紀行文風の報告書『抗日武装闘争戦跡地を訪ねて』（以下『戦跡地』と記す）[4)]や踏査団員が雑誌，新聞に執筆した文章などを見ることができる。また，中国側で踏査団に協力した人物（中国朝鮮族）についても，ある程度知ることができる。特に中国政府の指示によって踏査団に協力した抗日闘争史研究者金宇鍾（朝鮮族）の回想[5)]は重要である。これらによって，踏査団の活動を具体的に明らかにすることとしたい。

1　1959 年以前の踏査団

1.1　1946 年～1950 年の踏査団

まずここで，1959 年の踏査団以前に中国東北地方に派遣された踏査団について概略的に見ておこう。これに関しては，『歴史科学』2019 年第 4 号に掲載されたパク・クミルの論文「中国東北地方の抗日武装闘争資料を発掘収集するための事業が成果的に進行するよう指導された偉大な金日成同志の賢明な領導（主体 35（1946）－主体 48（1959））」[6)]が役に立つ。この論文は数次にわたる踏査団の概要を明らかにした最初の研究である。

1950年の踏査団までは他に利用できる資料がないため，このパク・クミル論文（以下「パク論文」とし，本文中に該当ページを記す）によって概要を記しておくことにする。

なお，パク論文（9ページ）は，中国東北への戦跡地踏査団は1959年までに6回にわたって派遣されたと書いているが，1953年に北京に派遣された代表団も1回の踏査団として数えているようである。

1946年6月，革命戦跡地踏査団が組織された。これは金日成の教示によるものだったようである[7)]。同年2月に北朝鮮臨時人民委員会の委員長になった金日成は，自らの権威を高めるために抗日パルチザンの歴史を広く知らしめる必要があったからである。同年8月19日，抗日革命闘争戦跡地踏査団が現地に派遣され，朝鮮北部と中国東北（臨江県，長白県，延吉県，和龍県，汪清県など）を2ヵ月にわたって踏査し，革命史跡物，遺跡，遺物を発掘収集し，縁故者・目撃者にも会ったほか，100余点の写真資料をはじめ実物資料と文献資料を収集した。

この時の踏査団には，作家韓雪野が参加したようである。韓雪野は，1946年に「金日成将軍印象記」や「英雄金日成将軍」などの文章を執筆して新聞に発表していた。韓は同年9月，中国東北地域の抗日武装闘争戦跡地を踏査し，それにもとづいて1000枚に及ぶ『金日成将軍伝記』を執筆したが，発表しなかったとされる[8)]。

続いて翌1947年5月にも，踏査団が組織された。この踏査団には，「抗日革命闘士」が網羅されたという。金日成は責任者を任命し，「踏査団が事業を成果的に進行できるよう」中国側に親書を送った。東北地方では国共の内戦が激しく，「情勢がいまだ安定していない困難な条件」の中で，安図，撫松をはじめ諸地域を踏査し，資料を発掘収集した。パク論文（8ページ）によれば，「オボイ首領〔金日成〕が反日人民遊撃隊を創建された時期に使用された真鍮器と遊撃隊員たちが使った機関銃，延吉爆弾など40余点の貴重な革命史跡物と遺物を発掘収集した」。

さらに，朝鮮戦争さなかの1950年秋，中国東北地方に抗日武装闘争時期の戦跡地を調査するための踏査団が派遣され，安図県，延吉県，撫松県などを踏査したという。この調査で，「戦闘場所と実物埋没場所などを調査掌握し，数挺の武器と数十発の弾丸，なべをはじめとする種々の遺物を発掘収集した」（パク論文8ページ）。当時は米軍を中心とする国連軍が38度線を越えて朝鮮北部に進撃した時期であり，そのため北朝鮮の党・政府の一部機関が中国領内に避難する事態になっていた。それを考えると，踏査団を組織して送るような余裕はなかったと思われる。中国領内に避難した機関がそこで調査をしたのではないかと思われるが，定かではない。

1.2　1953 年の踏査団

朝鮮戦争の停戦協定がむすばれるのとほぼ同時に，戦跡地踏査団が派遣されたが，これについてはいくつかの資料を利用することができる。

パク論文（8 ページ）は，1953 年 7 月，中国に代表団を派遣して，「抗日革命戦跡地踏査組織のための外交活動と資料発掘収集事業」を進めたとしている。具体的には，7 月 3 日から 25 日まで，代表団は北京で「外交活動」を行ない，各地域を踏査，「目撃者，縁故者に会って抗日武装闘争時期の資料を数多く収集，複写した」。その結果，「抗日武装闘争資料の内容と構成がいっそう改善され，戦後中国東北地方の革命戦跡地，史跡地踏査を通じた抗日武装闘争資料発掘収集事業を全面的に進行できる準備と担保が整った」という。

このような準備作業を行なったうえで，同年 8 月末に踏査団が中国東北地方に派遣された。踏査団は，国立中央解放闘争博物館（後述）の活動家（イルクン）をはじめ撮影家，作家，美術家など 10 名余りで構成された。12 月末までの 110 日間，8 県 48 ヵ所の革命戦跡地と 18 ヵ所の密営地，8 ヵ所の遊撃根拠地など 80 ヵ所余りの地域を踏査した。踏査団は，調査資料 1500 余枚をはじめ，117 点の遺物，217 点の図書を収集，309 点の写真を撮り，166 点の現地速写〔スケッチ〕をした（パク論文 9 ページ）。この踏査で撮影されたフィルムは，1956 年に記録映画「金日成元帥抗日遊撃戦跡地」として編集・公開された[9)]。

この 1953 年の踏査団については，別の資料でも比較的詳しく記述されている[10)]。それによれば，この年の踏査団は「金日成元帥抗日遊撃闘争戦跡地調査団」という名称で科学院が組織し，「松花江流域と長白山一帯にわたる金日成元帥の抗日遊撃活動地区」を調査するものだった。団長リ・ジョンヒョク（리종혁，解放闘争博物館館長），副団長コ・ヒョク（고혁，朝鮮労働党中央委員会宣伝煽動部副部長）および団員 8 名で構成された。

調査団はまず吉林省安図県で「〔金日成による〕1931 年抗日武装闘争部隊の組織編成のための活動事実を収集・記録」し，戦闘地を踏査した。また調査団は，「金日成元帥との連携のもとに展開された崔賢，安吉同志たちの遊撃根拠地と戦闘地区を踏査」した。その後，長白県で 1 ヵ月にわたる調査を行ない，集団部落や社会環境についての資料収集もした。臨江，撫松，濛江，汪清，延吉，和龍などでも調査を進め，中国共産党東満特別委員会の本部だった王隅溝で多くの資料を収集した。

「こうして調査団は，金日成元帥が祖国の自主独立のために展開した革命活動の輝かしい歴史的遺跡である 48 ヵ所の重要戦闘地と 11 ヵ所の密営，5 ヵ所の病院，そして 1 ヵ所の休養所，兵器廠，8 ヵ所の遊撃根拠地，6 ヵ所の金日成元帥の少年時期の活動地域，総計 80 ヵ所の地域を直接踏査・研究し，日程の関係で踏査できなかったところは関係者たちとの談話によって資料だけを収集した。」

このような調査にもとづいて次のような 8 編，2000 枚に達する調査記録が作成された。

第 1 編　抗日武装隊伍の組織のための金日成元帥の闘争
第 2 編　抗日遊撃根拠地の形成とその内容
第 3 編　祖国の自由・独立のために蹶起した金日成元帥抗日遊撃部隊の重要戦闘地
第 4 編　金日成元帥抗日遊撃部隊の内容――組織，編成
第 5 編　金日成元帥抗日遊撃部隊の秘密根拠地
第 6 編　金日成元帥指導下の《祖国光復会》の活動
第 7 編　金日成元帥遊撃部隊についての民間逸話
第 8 編　抗日武装運動に反対する日帝の反動的策動

調査団の成果については，次のように書かれている。

「調査団は，金日成元帥の革命活動を想起させる現地記録映画 488 カットと現地写真 309 点，そして現地写生画 166 点を製作し，重要戦闘地および金日成元帥が監禁されていた監獄などのパノラマ 7 点を製作させることになり，密営および病院，学校などに残っていたストーブ，石臼などの実物百数十点と金日成元帥の抗日遊撃闘争史研究資料となる図書および文献 40 余点を収集した。〔中略〕この栄光ある武装隊伍と革命団体に参加した革命闘士およびその影響下にあった愛国農民 200 余名と談話を重ね，資料を収集した」。

さらに，調査にあたって中国側から多大の援助を受けたことも，次のように記されている。

「また，調査団は金日成元帥の抗日遊撃部隊には朝鮮の愛国的革命闘士だけでなく，中国の熱烈な革命闘士たちが数多く参加して，その当時から共同の敵日本帝国主義を殲滅するために血縁的に結びついた朝中両国人民間の国際主義的親善の旗が燦然と輝いていたことを再認識した。我が科学院のこの意義深い調査事業に中華人民共和国政府が配慮してくれた親善的幇助と中国人民たちが我らの敬愛する首領金日成元帥に捧げる熱い尊敬心は，調査団一同を再度深く感動させた。すなわち，調査団は中華人民共和国政府から 12,000 万ウォン（人民貨幣）に達する財政的協助と延べ人員 1,400 名に達する兄弟的中国人民の労力的協助を得たのである。」

1953 年の調査団が作成した記録は，現在のところ見ることができず，印刷に付されたかどうかも不明である。しかし，この記録とは別に，調査団に加わった作家宋影が書いた紀行文的な記録『白頭山はどこからも望める』[11]が 1956 年に刊行された。宋影は，「1953 年抗日革命闘争戦跡地調査団の一員として遊撃根拠地，密営地，戦闘場など 82 ヵ所を踏査し，抗日武装闘争参加者，縁故者，現地住民 700 余名に会った」「白頭の千古密林を分け入り，7000 Km〔原文どおり〕近くの長い路程を踏査しながら，彼は解放前に話しだけで伝え聞いた白頭の血のにじんだ跡を心臓に刻み，大いなる感激と興奮にあふれて，2 ヵ月の間に踏査紀行文集《白頭山はどこからも望める》を執筆完成した」[12]と評価されており，金日成の回顧録も，宋影の『白頭山はどこからも望める』に言及している[13]。

宋影の記録にしたがえば，踏査団の主な調査地は金日成が活動した地域であって，崔庸健や金策らが活動した黒龍江省には足を運ばなかったようである。

2　1959 年の踏査団

2.1　踏査団派遣の背景

北朝鮮から中国東北地方に戦跡地踏査団が派遣されるについては，それなりの背景があったと考えられる。1946 年から 1950 年までの踏査団については，詳しいことはわからないが，1953 年の踏査団派遣は，朝鮮戦争停戦前後に朴憲永ら南朝鮮労働党系の人物が粛清されたことと関連していると見られる。南労党系（あるいは国内派）の「革命実績」を否定するとともに，金日成らパルチザン派の「革命実績」を証明するために踏査団が派遣されたと考えることができよう。

北朝鮮で政権のイニシアティブ掌握を争っていたのは，パルチザン派，国内派（特に南労党系），延安派，ソ連系であった。前三者は，それぞれ中国東北地方における抗日パルチザン活動，朝鮮国内での非合法活動と解放後の南労党の活動，中国での朝鮮独立同盟などの運動を自らの「革命実績」としていた。ソ連から派遣されたグループは特定の「革命実績」を持たず，一定の派を形成していたわけではないため，ソ連系と呼ぶべき存在であった。国内派の粛清の後，1956 年のソ連におけるスターリン批判を受けて，北朝鮮においても金日成の個人崇拝に対する批判を主に延安派が提起したが，パルチザン派によって批判が抑えられ，延安派，次いでソ連系の幹部らが追放，粛清されることになった。これによって，パルチザン派が政権を完全に掌握したが，その正統性を高めるために中国東北地方に踏査団を派遣して，パルチザン活動の歴史をいっそう確固たるものにする必要性が認識されたと考えられる。1950 年代後半には，金日成部隊が朝鮮国内に進撃した普天堡戦闘（1937 年 6 月）の意義が強調され，普天堡に博物館が建設されたり，抗日パルチザンに関わる文献（『抗日パルチザン参加者たちの回想記』など）の刊行が進められたりした。中国東北への踏査団の派遣は，このような動きの中で行なわれることになったのである。

2.2 踏査団の構成

1959 年に派遣された踏査団が 1946 年以降の踏査団の活動と成果を踏まえたものであったことは，容易に想像がつくが，踏査団派遣のための準備，とりわけ中国側との交渉は前年になされたようである。1959 年踏査団の団長となる朴永純は，解放直後から中国側との交渉役を務めていた[14]が，1958 年に延辺自治州を訪れ，州長朱徳海ら州幹部の接待を受けて，延辺，長白山地区で戦跡地調査をし，朱徳海の批准を受けて中国の博物館の抗日文物・資料の現物を北朝鮮に持ち帰ったという[15]。

1959 年 3 月，新たな革命博物館に関する内閣決定第 14 号命令が出され，それに関連する形で中国東北に戦跡地踏査団を派遣することが決められたと見られる[16]。

踏査団は，「抗日革命闘士たち，党歴史研究所と革命博物館の職員，軍事専門家と作家，撮影家，画家など 26 名で構成」された[17]。1953 年の調査団の 2 倍以上の人員である。ただし，すべてのメンバーが全行程に加わったわけではなく，部分参加にとどまった者もいる[18]。

団長は，パルチザン参加者の朴永純[19]である[20]。朴永純は，解放後の北朝鮮で党と軍の要職を歴任してきたが，1960 年代には『抗日パルチザン参加者たちの回想記』に数

多くの回想文を書いており，パルチザンの歴史を伝承する上で重要な役割を果たすことになる人物である。副団長は，労働党中央委員会直属の党歴史研究所[21]指導員金泰浩であった[22]。団長，副団長の地位から見て，踏査団は労働党中央委員会によって組織，派遣されたと考えられる。

踏査団には，朴永純以外にも抗日武装闘争を体験した老闘士が団員として加わった。踏査団の紀行文風報告書『戦跡地』などには，李鳳洙（리봉수），李斗賛（리두찬），曺道彦（조도언），パク・スンホ（박승호）の4名の名前が記されている。このうち李鳳洙，李斗賛の2人は，いずれも死去後に革命烈士陵に墓が設けられた人物であり，「朝鮮人民革命軍指揮官」とされる[23]。

これら2人と違い，曺道彦は革命烈士陵より格の低い愛国烈士陵に埋葬された「抗日革命烈士」である[24]。『抗日パルチザン参加者の回想記』第2巻に「苦難の行軍」，第1巻，第6巻にも回想文，『戦闘回想記』第1巻にも回想文を書いている。もう一人のパク・スンホに関しては，略歴など不明である[25]。

踏査団には，各分野の専門家も加えられた。

画家としては，文学洙，鄭寛徹の2人である。いずれも解放前に日本で美術を学んだことがあり，北朝鮮を代表する油絵画家である。文学洙は解放直後に平壌に戻った金日成が「凱旋演説」をする場面を描いた「金日成元帥の祖国凱旋図」，鄭寛徹は金日成らのパルチザン部隊が朝鮮国内の村に進撃した普天堡戦闘を描いた「普天堡の烽火」でよく知られる。文学洙は踏査の間，日記をつけていたようで，その一部が，『朝鮮美術』1960年第3号，第4号に掲載された。その文章には文学洙が描いた絵だけでなく，鄭寛徹の絵も添えられている。1962年に文学洙と鄭寛徹は二人展「革命戦跡地踏査美術展覧会」を開催して，踏査時に描いた絵画，スケッチなどを展示した[26]。

文学者としては，姜孝淳，黄健，リ・ジョンスン（리종순），朴雄傑，ミン・ビョンギュン（민병균）の5名が踏査に参加した[27]。黄健は，文学洙と鄭寛徹の二人展に寄せた文章で，「1959年春，夏，秋の5ヵ月にわたる踏査期間，東北と国内の数万里の踏査旅程を私も彼らとともに歩いた1人である」と書いている[28]ので，踏査の全行程に参加したと思われる。踏査団の名前で出された紀行文『戦跡地』は，劇・シナリオ作家のリ・ジョンスンが執筆したとされており，後述のように踏査にもとづく文章を各種の新聞・雑誌にいちばん多く書いているのもリ・ジョンスンである。リ・ジョンスンが踏査団の文学者グループの中心だったと思われる[29]。

作家同盟書記長の朴雄傑と詩人・評論家のミン・ビョンギュンは，『児童文学』に掲

載された座談会で自身が踏査団に参加したと語っている[30]。朴雄傑は『文学新聞』に2編の踏査紀行文を書いてもいる[31]。

以上のように，26名で構成された踏査団のうち名前が知られるのは，半数ほどで，残りの団員に関しては情報がない。写真・映画の撮影家，その他の技術者が含まれていたと思われるが，金泰浩を除けば歴史研究者が1人も入っていないことが注目される[32]。

2.3 中国側の協力者

1953年の調査団が中国側から多くの援助を受けたのと同じく，1959年の踏査団にも中国側からの援助があったと思われるが，『戦跡地』などにはそれについての記述は見られない。しかし，中国側では，特に延辺朝鮮族自治州の政権機関や党機関が踏査団に援助を与えるとともに，抗日パルチザン参加者などの体験者が踏査団に同行して案内人の役割を果たした。このような踏査団協力者として記録に名前がでてくるのは，石東洙（석동수），姜渭龍（강위룡），崔鳳松（최봉송），カン・ナムチョル（강남철），黄貴軒（황귀헌）などである。

『戦跡地』（p.87）には，「延吉で自治州の党・政権機関責任幹部，活動家，人民の歓迎と幇助を受けた。朴永純同志，そこで会った闘士石東洙，姜渭龍，崔鳳松から感銘深い回想談を聞いた」と記されている。朴永純を除く3名は延辺自治州の幹部として活動していた人物であった。

石東洙は，1930年代後半に東北抗日連軍（抗連）第二軍の金日成部隊で活動した隊員で，普天堡戦闘にも参加したようである[33]。1940年代前半にソ連領内に移った抗連部隊と別れて，東北地方にとどまっていたが，1945年9月抗日連軍延辺分遣隊（責任者姜信泰）の一員となった[34]。その後，延辺大学の党支部書記や自治州政府党組織の政法党組書記を歴任し，1955年から自治州副州長を務めた[35]。1959年時点では州長朱徳海の下にいた副州長7名（うち朝鮮族3名）のうちの1人だった[36]。延辺の朝鮮族幹部としては朱徳海に次ぐ地位にいたことになる。

姜渭龍（1914～2001）は，1933年に和龍県で遊撃隊に入隊し，1936年には抗連第二軍第6師に配属され，金日成部隊の一員として普天堡戦闘に参加した。1940年ソ連領に移動して，抗連教導旅の小部隊・偵察活動に従事した。1945年9月，抗連の延辺分遣隊の一員として延吉に進駐した。その後，延吉県人民武装部長[37]，中共延辺朝鮮族自治州委員会委員[38]となった。姜渭龍は延辺の幹部でありながら，1959年以前からパル

チザン関係資料の収集に関して北朝鮮に協力していたようである[39]。

石東洙と姜渭龍は，踏査団に協力した後，1960年代前半に延辺から北朝鮮に移り住んで，パルチザンについての回想文を書いたほか，石東洙は朝鮮革命博物館の館長に就任した。この点については，後述することにする。

崔鳳松については，平壌の愛国烈士陵の墓碑に生没年（1912～1972）とともに「抗日革命烈士」と刻まれているだけで，経歴などは不明である。ただし，1965年から1969年まで抗日闘争に関する回想文を4編[40]書いており，石東洙らと同じように1960年代半ばまでに延辺から北朝鮮に移ったと見られる。

石東洙，姜渭龍，崔鳳松の3名は，踏査団の行程の多くに同行して案内をしたり，現地の党・行政機関との交渉に当たったりしたと見られる。パルチザン参加者であるという点で，団長朴永純ら踏査団のメンバーと隔意のない交流・情報交換をしたといえる。『戦跡地』は，和龍県魚郎村の兵器廠跡を踏査した際のこととして次のように記している。

> 「〔踏査団員らは〕朴永純同志と姜渭龍同志から，当時この兵器廠でともに武器を修理し製作するのに苦心した話を聞いた。今は朝鮮と中国に別れて働く2人の同志が，30年が過ぎた今日，ともに働きながら苦心したその場所で再会し，その当時を回想するそのこと自体がすでに感慨無量のことに違いなかった。」（77ページ）

吉林まで踏査団に同行してそこで金日成ゆかりの場所を案内したのは，黄貴軒（1914～2001）という女性である。1927年に金日成が吉林で朝鮮人吉林少年会を組織・指導した時，同会に加入した女性で，解放後は延辺大学教員となっていた[41]。踏査団が平壌を出発するにあたって，金日成は延吉に住む黄貴軒に会うように踏査団に指示したという[42]。黄貴軒は，すでに1953年の踏査記録に登場しているので[43]，金日成の指示がなくても踏査団が協力を求める対象だったと思われる。黄貴軒はその後も延辺大学に勤務したが，1980年代に北朝鮮に移り住むことになる。

なお，カン・ナムチョルというもう一人の協力者については，どのような人物か不明である。

中国側（特に延辺朝鮮族自治州）で踏査団に協力したこれらの朝鮮族幹部は，踏査団に同行することによって自らの抗日闘争，パルチザン活動の体験を再確認することになったのである。

関連地図

2.4　踏査の行程と調査活動

踏査団は5月14日に中国領内に入ったと書いている中国側文献[44]があるが，朝鮮側の文献では，踏査団が派遣されたのは5月21日から9月25日までの4ヵ月あまりだったとされる。踏査地域については，次のように概括されている。

「延吉県，和龍県，汪清県，琿春県，寧安県，安図県，敦化県，樺甸県，盤石県，濛江県，撫松県，臨江県，長白県一帯と，両江道をはじめとする〔朝鮮〕国内一部地域など広大な地域の革命戦跡地を踏査」した（パク論文9ページ）。また，黄健は，「東満全地域と北満・南満の一部地域17の県・市に及び，汽車，自動車，船，徒歩で通った距離は無慮3万キロに達した」と書いている[45]。

これらの地域で踏査団が訪ねたのは，文学洙の記述によれば，「数千，数万の戦闘地域，日帝の鉄鎖から人民を解放した街と村，腰営溝や南湖頭をはじめとする歴史的な会

議場所，革命闘士たちの苦難に満ちた生活の痕跡が生き生きと残っている密営と宿営地，そして千古の密林をかき分けて国内にまで及んだ遊撃隊員たちの行軍路」[46]などであった。「戦跡地」の言葉が指すような戦闘場所だけが踏査団の調査対象だったわけではない。むしろ戦闘場所以上に，パルチザン部隊の根拠地・宿営地・密営，部隊や党組織の会議場所などが重要と考えられた。それら調査地では，パルチザン参加者の朴永純や姜渭龍の体験談を親しく聞いたり，住民から目撃談などを聞き取ったりするとともに，遺物を発掘し，映像を写し，絵に描いた。さらに会議が開かれた丸木小屋や密営のための小屋を復元したところもある。

画家文学洙が雑誌『朝鮮美術』（1960 年 2 号，3 号）に抜粋を載せた日記[47]の記述を織り交ぜながら，踏査団の行程をたどってみよう。踏査団が訪れた場所と時期は，わかる限りでは次のとおりである[48]。

最初に訪れたのは延辺朝鮮族自治州の州都延吉市である。そこで中国側の党・政権機関と打合せをし，中国側の同行者と合流をして，和龍県から踏査を開始した。

> （文学洙日記 5 月 29 日）「踏査事業が始まって早くも 1 週間が過ぎた。その間に 1930 年代初期の遊撃根拠地和龍県魚郎村，‘三日ソヴェト’となった薬水洞部落を経て開山屯に到着した。」（1960 年 3 号，21 ページ）

延吉に戻った踏査団は，6 月 10 日頃に汪清県に行った。汪清は 1930 年代半ばに金日成が活動した遊撃根拠地である。12 日に汪清県腰営溝（1935 年に金日成が主宰する会議が開かれたとされる）の調査を終え，羅子溝に向かい[49]，6 月中旬に汪清県羅子溝と琿春県を踏査した。6 月下旬に羅子溝から黒龍江省寧安県，さらに東寧県にも足を延ばして，7 月 6 日に再び汪清県に戻った。

> （文学洙日記 6 月 23 日）「踏査事業もひと月が過ぎて，次第に慣れてきた。〔中略〕我々一行は汪清県の踏査事業を終え，歴史的な 1935 年腰営溝党・軍政幹部会議の場所を経て，北満遠征の長途にのぼられた金日成元帥が自ら率いられた朝鮮人民革命軍隊伍の進軍路にしたがって黒龍江省寧安に向かって出発した。」（1960 年 3 号，24 ページ）

その後，汪清から延吉に戻って，次に向かったのは，1930 年代前半に金日成がパル

チザン活動を開始した安図県の遊撃根拠地だった。

（文学洙日記 7 月 18 日）「踏査団の全体成員らは安図県での戦跡地踏査の最後のコースである車廠子に向けてシプキガ〔村の名称と思われるが漢字不明〕を発った。我々一行は 40 里の道を背を超える草原をかき分けて，湿地を横切り，午後 1 時頃に車廠子に到着した。我々は昔のパルチザン闘士同志たちとともに車廠子遊撃根拠地の戦跡地を訪ねて丘を越えた。」（1960 年 4 号，2 ページ）

車廠子の兵器廠跡では，地下に埋もれた遺物を探すために，金属探知機を使用した[50)]。

その後，吉林省での踏査を行なうため，8 月初旬に吉林市に赴き，10 日に撫松県に到着した。撫松は金日成が 1925 年に朝鮮から移り住み，活動を開始した町である。この撫松では踏査団の参加者は 40 名から 50 名にもなり，15 日まで撫松に滞在した。踏査団は中国側の党・政府指導部から丁重な接待を受け，金日成の旧居や撫松第一学校旧跡などに案内された。踏査団は撫松で戦跡地と遺跡地 27 ヵ所を調査，撫松の東南にある東崗大碱場の密営跡では鉄鍬や煤油灯などを発掘したという[51)]。

撫松では，金日成の撫松時代からの親友で，後に金日成らのパルチザン部隊を支援する活動をした張蔚華（漢族）の遺族に会うことも踏査団の重要な任務であった。張蔚華は 1936 年にパルチザンとの関係が発覚して逮捕され，病保釈後に自決していたが，妻や息子らが健在であった。8 月 12 日に踏査団は張蔚華の旧宅を訪問し，遺族に対して金日成からの挨拶を伝えた。踏査団の撮影師や画家は張家の住居を撮影したりスケッチしたりした。また，張家に残っていた写真などの資料を入手することができた[52)]。

（文学洙日記 8 月 16 日）「昨日は 8・15 の名節だ。我が踏査団一行のために撫松県党では我が国の民族的名節である 8・15 を祝って盛大な祝賀宴を開いてくれた。1920 年代に金日成元帥が父とともに暮らされた小南門通の古い家をはじめ，幼い学生らを連れて遊びに行かれた撫松江畔の三つ岩，優級小学校（撫松第一小学校）と分校の跡，小南門，大南門戦跡地と東山砲台，首相〔金日成〕同志が交際された張蔚華同志の家など，実に撫松市は首相同志の革命活動の由緒深い街である。」（1960 年 4 号，4-5 ページ）

撫松での調査の後，踏査団は長白山地区に向かった。1938～39年に金日成部隊が日本の討伐作戦を逃れて密営を設けた地域である。「苦難の行軍」の舞台でもある。リ・ジョンスンは次のように記している。

「我々は，撫松鎮から東南方向に百余里〔朝鮮里で約40キロメートル〕を自動車で走り，東崗へ，ここからふたたび山林鉄道に乗り換えて南に50里余り行って，まさに長白県と臨江県の境界地点であるとともに撫松地方の最南端の小さな市街である漫江鎮（鎮というのは日帝時期に朝鮮にあった邑と同じもの）に至った。」[53)]

8月13日撫松県漫江，8月中旬臨江県楊木頂子，8月下旬八道溝渡し場（長白朝鮮族自治県）など金日成の初期の活動舞台を踏査したのち，8月25日長白県に赴いて，約1ヵ月そこで調査を行なった。長白山地区では鉄道も自動車も利用できないため，踏査団は徒歩で長白山地区の深い山に分け入らねばならなかった。

（文学洙日記9月10日）「昨日は朝鮮革命の総参謀部と呼ばれる長白瞎子溝の密営地で一晩を過ごし，朝早く白頭山の最後方密営地である紅頭山に向けて山を登った。行けども行けども深い密林の中に入って行くばかりだ。〔中略〕ついに海抜2000メートルの高山地帯の紅頭山戦跡地が見える尾根に上がった。〔中略〕過ぐる時期，この雄大な大自然の中で祖国の光復のために昼夜を分かたず闘争された金日成同志をはじめとする共産主義者たちの姿をもう一度思い浮かべてみずにはいなかった。」（1960年4号，7-8ページ）

長期にわたる長白山地区での踏査を終えた後，9月下旬には朝鮮国内に入って，普天堡（両江道甲山郡），9月21日大紅湍（両江道茂山郡）を踏査し，25日に平壌に戻った。4ヵ月余りの踏査期間のうち，朝鮮国内を調査した数日を除いてほとんどの時間を中国領内での踏査に費やしたのである。

2.5　黒龍江省での調査

踏査団の行程に黒龍江省の寧安県と東寧県が含まれていたことは，すでに述べたが，これらのほか同省のハルビンや牡丹江市，およびその周辺にも足を運んだ。これについては『戦跡地』では触れられていないが，金宇鍾が黒龍江省での調査について証言を残

している。中国側から踏査団に提供された文書資料に関して，金宇鍾は次のように述べている[54]。

「中国共産党中央では，周恩来総理の直接指示で朝鮮踏査団事業を協助するため事前に徹底的に準備した。踏査団の日程をチェックし，宿所と交通の便を按排し，協助の人員を配置するなどのことであった。のみならず，中国は抗日闘争関連文書資料を朝鮮側に提供するための事業チームも別途つくった。朝鮮側に参考となるべき文書資料を選別し，あるいはその中に朝鮮に送って問題となる資料はないか，細かく確認しなければならなかった。」

黒龍江省では，中国共産党の省委員会宣伝部長が事業チームの最高責任者となり，抗日老闘士で副省長の于天放と宣伝部副部長王晋が実務を指揮した。当時黒龍江省教育学院訓練部・政治学部主任だった金宇鍾（のち黒龍江省党史研究所所長となる）は，日本語資料の選別などを担当した。このような準備事業は，踏査団の訪中以前の 3 月から始まっていたという。

「档案資料の検討と選別事業のためのいくつかの指針が下りてきた。朝鮮と関連ある档案資料は，可能な限り多く提供せよというのが大原則だった。ただし，中国と朝鮮との親善関係を害する恐れがある資料は除外するようにした。日帝が中朝抗日戦線を破壊するために謀略工作を行なった資料，これを通じて中国人と朝鮮人幹部の親善を害し離間させた資料などを指すものだ。また朝鮮の主要領導者らを誹謗する内容の資料も除外するようにした。我々はこの事業を通じて少なくない文書資料をあらかじめ選別し，5 月に朝鮮から踏査団が来るや，档案資料を渡した。」[55]

金宇鍾らが選別し準備した資料を受け取るためにハルビンにやって来たのは，当時北朝鮮の人民経済大学教育学部長だった楊亨燮（のち社会科学院院長，最高人民会議議長などを歴任）だったという[56]。

さらに，金宇鍾によれば，踏査団は吉林省を調査した後，黒龍江省に入って約 1 ヵ月間調査したという。金は踏査団を黒龍江省の牡丹江，寧安，東寧に案内し，ハルビンでも接待して見送った[57]。金宇鍾は，団長朴永純や副団長金泰浩などにも会ったと書いているので，踏査団全員ではなくとも主要メンバーが黒龍江省でも調査をしたと考えられ

る。

黒龍江省の南部寧安県は一時金日成の部隊が活動したこともあるが，それ以外の地域は金日成とはあまり関係がなかった。しかし，黒龍江省北部や東部の地域は，東北抗日連軍傘下のパルチザン部隊が活動したところであり，解放後の北朝鮮において核心的な幹部となる崔庸健や金策などの朝鮮人がそれらの部隊で重要な役割を果たしたところであったので，北朝鮮の側でもこれらの地域でのパルチザンの歴史は調査すべきものととらえられていた。踏査団の成果を公表する際には，金日成の活動を前面に出して，崔庸健らの活動はほとんど触れられることがなかったとはいえ，調査対象から除外すべきものとは考えられていなかったのである。

3　踏査団の成果

3.1　調査収集資料展示会

踏査団が平壌に帰って1ヵ月半あまり後，11月15日から大同江畔の国立中央解放闘争博物館で「抗日武装闘争戦跡地踏査団収集資料展示会」が開かれた。この展示会を紹介する記事は，『労働新聞』（11月30日），『民主朝鮮』（12月1日）などに大きく掲載された。これらの記事では，踏査団は戦跡地170ヵ所を調査して，130点余りの遺物を収集し，9026メートルの映画フィルム，1950カットの写真を撮影し，529点の油絵・水彩画・鉛筆画などを描いたと書かれている。

展示会は，金日成の活動を時期ごとに紹介する形式をとっていた。撫松や吉林での初期の活動，遊撃隊を組織した安図，抗日部隊と党の幹部となっていった汪清根拠地，汪清を離れてパルチザン活動を続けた南満の撫松・長白山地区，再び東満に戻って日満討伐隊と戦った和龍など，活動舞台の変遷を地図，写真，絵画，そして実物資料で示す展示会であった。とりわけ，遊撃隊員が使用した地下足袋や鍋・釜，裁縫道具，そして手製の武器などの実物資料が目を引いたようである。

展示物がどのようなものだったかを具体的に知るために，『民主朝鮮』に掲載された写真，遺物の説明文を引用してみよう（活動時期の順番に並べ替えた）。

・（写真2点）金日成元帥が吉林毓文中学校在学当時，秘密裡に共青会議を指導するために会議場所として使用された吉林北山薬王廟と薬王廟地下室に下りる際に使用した梯子

・（遺物）1932 年初めから 1933 年まで和龍県魚郎村遊撃根拠地内にある病院で使用していた朝鮮釜

・（遺物多数）1933 年 9 月から 1935 年 2 月まで和龍県魚郎村遊撃根拠地内の泉谷，西北谷にあった秘書処，兵器廠，裁縫隊が使用した遺物

・（遺物）金日成元帥が安図遊撃隊を組織した当時，旧安図にあったマ・チュヌク家の天井秘密会議の場所で敷いて座った馬鞍の覆い

・（写真）1934 年 6 月汪清県羅子溝侵攻戦闘時に金日成元帥が親率した朝鮮人民革命軍部隊が占領し，赤旗をなびかせた西山砲台跡

・（写真）1936 年 2 月寧安県南湖頭で開かれた軍政幹部会議場所（丸太小屋は原状どおり復旧したものである）

・（遺物）1936 年から 1937 年まで臨江県楊木頂子密営で使用したひき臼

・（写真）瞎子溝密営（丘の上の小屋は金日成元帥が使用していたもので，下の小屋は兵室である）

・（遺物 2 点）1940 年頃朝鮮人民革命軍司令部の炊事隊員らが金日成元帥に飲食を煮てもてなした鍋と金正淑女史が使用した器

展示会では，金日成が幹部となった遊撃部隊（東北人民革命軍（のち東北抗日連軍）第二軍だが，北朝鮮では「朝鮮人民革命軍」とされる）に関わる資料の展示が中心となっていたことがわかる。金日成に関わる資料が特に強調されていたが，必ずしも金日成に結びつくわけではない和龍県の遊撃隊に関する資料も展示されていた。

踏査団収集資料の展示会が臨時のものだったか，あるいは会場となった解放闘争博物館にその後も展示されていたかは明らかでない。しかし，これらの展示物は，のちに金日成広場に面して新たに建てられた建物で開館した朝鮮革命博物館の展示に引き継がれることになる。

3.2　踏査紀行文などの執筆

踏査団の成果としてあげられる第二のものは，団員による踏査記録や紀行文の執筆である。先に述べたように，踏査団の公式記録としては紀行文風の『戦跡地』が 1961 年に刊行されたが，それ以外に踏査団員による文章が各種の新聞・雑誌に数多く掲載された。それらは実話文学（ロシア語でオチェルク）あるいは随筆という形式をとっている。知り得る限りでは，次のような文章が発表された。文学洙を除いてすべて文学者に

よるものである。

・박웅걸「혁명 투사들이 걸은 불멸의 길――희샤즈거우 밀영지를 찾아서」『문학신문』제 197 호，1959 년 12 월 11 일

（朴雄傑「革命闘士たちが歩んだ不滅の道――瞎子溝密営地を訪ねて」『文学新聞』第 197 号，1959 年 12 月 11 日）

・강효순「가재수의 인상」『문학신문』제 197 호，1959 년 12 월 11 일

（姜孝淳「カジェスの印象」『文学新聞』第 197 号，1959 年 12 月 11 日）

・강효순「장백 20 도구의 인상」『청년문학』1960 년제 2 호

（姜孝淳「長白 20 道溝の印象」『青年文学』1960 年第 2 号）

・황건「소왕청에서――항일유격전적지 답사 일기에서――」『문학신문』제 215 호，1960 년 2 월 23 일

（黄健「小汪清にて――抗日遊撃戦跡地踏査日記から――」『文学新聞』第 215 号，1960 年 2 月 23 日）

・황건「영광의 발자욱을 더듬어」『조선』1960 년제 4 호

（黄健「栄光の足跡をたどって」『朝鮮』1960 年第 4 号）

・리종순「김일성 원수의 학생 시기의 이야기 중에서」『조선문학』1960 년제 4 호

（リ・ジョンスン「金日成元帥の学生時期の話から」『朝鮮文学』1960 年第 4 号）。

・리종순「그이의 첫 공청 활동」『새세대』1960 년제 4 호

（リ・ジョンスン「その方の最初の共青活動」『新世代』1960 年第 4 号）

・리종순「빨찌산이 들렸던 마을에서」『청년문학』1960 년 제 10 호

（リ・ジョンスン「パルチザンが入った村で」『青年文学』1960 年第 10 号）

・리종순「라자구 전투 전적지를 찾아서」『로동신문』1962 년 6 월 29 일

（リ・ジョンスン「羅子溝戦闘戦跡地を訪ねて」『労働新聞』1962 年 6 月 29 日）

・민병균「（시）빨찌산들의 자취를 따라」『조선문학』1960 년제 11 호

（ミン・ビョンギュン「（詩）パルチザンの跡に沿って」『朝鮮文学』1960 年第 11 号）

・「김일성원수 항일유격전적지를 찾아서」『아동문학』1959 년 12 월

（（座談会）「金日成元帥抗日遊撃戦跡地を訪ねて」『児童文学』1959 年 12 月）（出席者：姜孝淳，朴雄傑，リ・ジョンスン，ミン・ビョンギュン）

・문학수「항일 무장 투쟁 전적지 답사 일기 중에서」『조선미술』1960 년 3 호，1960 년 4 호

（文学洙「抗日武装闘争戦跡地踏査日記から」『朝鮮美術』1960 年第 3 号，1960 年

第 4 号）

・문학수「무송진을 찾은 그날의 감회」『천리마』1963 년제 8 호

（文学洙「撫松鎮を訪ねたその日の感懐」『千里馬』1963 年第 8 号）

これらの文章は，文学洙の日記を除いて，踏査団の行程については断片的に述べているだけであり，ほとんどは資料と聞き取りなどにもとづいて金日成をはじめとするパルチザンの活動を再現しようとしたものである。これら以外にも，文学者らがその後に執筆した作品に踏査団での体験が反映されることになった点も重要であろう。

また，踏査団の団長朴永純らパルチザン参加経験者は，この後，『抗日パルチザン参加者たちの回想記』などに多くの文章を発表することになるが，そこでも踏査団に参加して見聞したこと，体験したことが生かされていることはいうまでもない。

さらに興味深いことに，踏査団を中国側で援助した石東洙が，中国の出版物にパルチザン時期の回想記を発表したことが確認できる[58]。踏査団に同行したことには触れていないが，それが一つのきっかけとなって回想記を発表したように思われる。

踏査団の成果に関しては，次の 2 点を断っておかねばならない。

1 つは，画家として踏査に参加した文学洙，鄭寛徹が描いた美術作品についてである。彼らは踏査に関連する多くの作品を描き，それらの展示会も開いたが，それに関しては本稿では省略することとした。

2 つめは，踏査団がパルチザン参加者や住民から行なった聞き取りに関する問題である。これらの聞き取りにもとづいて口述記録が作成されたと思われる。その一部である王潤成（漢族）の口述記録が中国の文献に収録されており，「1959 年に中国東北訪問朝鮮抗日戦跡地踏査団成員らの前で述べた前抗日連軍第二軍指揮官王潤成同志の回顧談を要約整理したもの」と注記されている[59]。このようにして作成された口述記録は，朝鮮側でも保存されたと思われるが，一般に読める形で活字化されていない。

3.3　朝鮮革命博物館――抗日闘争史の「更新」

踏査団の成果としてもっとも重要なのは，朝鮮革命博物館に踏査団が収集した実物資料や写真，絵画などが展示されたことである。

革命博物館の前身である国立中央解放闘争博物館は，1948 年 8 月に平壌で「8・15 解放 3 周年記念大展覧会」が開かれた時，「解放闘争館」が設けられ，それを引き継いで翌 1949 年 2 月 23 日に「朝鮮民族解放闘争記念館」という名称で開館した[60]。朝鮮戦争後の 1955 年に大同江のほとり（右岸）に博物館の建物（現在は金成柱小学校となって

いる）が建てられたが，その後，新たな建物が1960年に金日成広場を挟んで中央美術博物館と向かい合った位置に完成した。展示などを整えて新たに開館したのは，1961年1月13日のことである。この時に名称を朝鮮革命博物館に改めた。そしてさらに，1972年に万寿台の丘に建てられた新たな建物に移転して，現在に至っている（金日成広場の革命博物館の建物はその後，朝鮮中央歴史博物館として利用されている）。

この間，1968年と2010年代後半には，展示の全面的改編が行なわれたが，1959年の踏査団の成果が大きく反映されたのは，1961年から1968年までの展示であったと見られる。この時期の展示内容を知ることができる文献の1つは，日本語版図録『朝鮮革命博物館』（外国文出版社，1963年）である。その序文には，「当博物館は，抗日パルチザンの戦跡地踏査事業で発掘，収集された2000余点の貴重な遺物や資料を補充，整理し，1961年1月，9000余平方メートルの新館に移転した」と記されている。前述のように踏査団が収集した資料，遺物，写真などは，1959年11月に解放闘争博物館で展示されたので，これらが新たな革命博物館に引き継がれたことは間違いない。

1959年の踏査団の成果と革命博物館の展示との関係を示すものとして，『戦跡地』に掲載された写真と革命博物館の展示写真とを比べてみよう。（付表）は『戦跡地』掲載の写真が革命博物館の図録（1963年および1974年の日本語版[61)]）に掲載されたかどうか，また1990年代に刊行された金日成回顧録の口絵に使われているかどうかを示したものである。

これによって見ると，1959年の踏査団が撮影し，『戦跡地』に掲載した写真22枚のうち8枚が1963年版の図録に掲載されているのに対し（『戦跡地』収録とは異なる写真だが，同じ時期に撮影したと思われるものを含めると12枚），1974年版の図録ではわずか3枚しか収録されていないことになる。その一方で，金日成回顧録の口絵には，1963年版図録とほぼ同じ写真が掲載されている。つまり，1959年の踏査団の成果は1961～68年の革命博物館の展示に大きく反映されたのに対し，1972年に万寿台に移転した博物館ではあまり使われなかったこと，しかし，金日成の活動を集大成した回顧録では再び踏査団の成果が生かされたことがわかる。このような変化の要因が何であったかは今後検討すべき課題としておきたい。

なお，1963年版図録では，「北満地方における朝鮮共産主義者の闘争」と題して，黒龍江省における崔庸健や金策，姜健らの活動が簡単に紹介されていることも見落とせない点である。これも踏査団の成果といえよう。

付表　『抗日武装闘争戦跡地を訪ねて』（1960 年）収録写真とその使用状況

ページ	キャプション	『朝鮮革命博物館』（1963 年，日本語版）掲載	『朝鮮革命博物館』（1974 年，日本語版）掲載	金日成回顧録『世紀とともに』口絵掲載（巻）
10	八道溝の渡し場			
16	金日成元帥がおられた家〔撫松〕			1 巻(撮影角度が違う)
22	吉林毓文中学校全景	○		1 巻
28	興隆村全景			
44	金日成元帥が安図遊撃隊骨幹を育てた当時の興隆村アジト，馬の鞍	○		2 巻
82	加羅支峰密営	（違う写真）		3 巻（違う写真）
84	〔吉林の北山公園薬王廟と地下室に下りるのに使ったはしご〕	○	○	1 巻
118	吉清嶺全景，（右）敵の砲台			
154	琿春県烈士塔			
156	金日成元帥が小汪清遊撃根拠地で住まわれた家	○		3 巻
192	車廠子病室跡			
204	〔東寧県城〕		○	
220	大荒威会議の場所			4 巻（違う写真）
258	南湖頭会議の場所	（違う写真）	○	4 巻
288	密営で作戦計画をされる金日成元帥〔絵画〕	○		
294	黒瞎子溝密営	（違う写真）		5 巻
296	白頭山密営			
300	王家洞の全景と権永璧同志の家	○		6 巻
320	腰営口会議場所	（違う写真）		
342	南牌子で行われた会議の場所	○		7 巻
342 後	馬塘溝密営			7 巻
362	開山屯にあるアジト	○		

4　中国側協力者たちのその後

戦跡地踏査団に関わる問題として，中国側で踏査団に協力した朝鮮族幹部らのその後について述べておきたい。延辺朝鮮族自治州の幹部として踏査団に協力し踏査に参加した石東洙，姜渭龍，崔鳳松，黄貴軒がその後，延辺を離れ，北朝鮮に移り住み，中には北朝鮮で党・政府の重要幹部となった人物がいることが知られるからである。

まず，黒龍江省で朝鮮人のパルチザン活動に関する資料を選別して踏査団に提供した金宇鍾の回想を見ておこう。金宇鍾は朝中関係が悪化した文化大革命期に身柄を拘束されたが，その嫌疑はすでに述べたように金が踏査団に資料を選別・提供し，各地を案

内・通訳したことであったという。文革派による訊問を受けた時，金は周恩来ら上部からの指示に従ったもので，個人的に踏査団に協力したものではないと弁明した。省外事弁公室に保存されている踏査団接待報告書も調べられた結果，金の供述に間違いがないとされ，「朝鮮特務」の嫌疑は晴れ，7ヵ月にわたる収監から釈放された。金のほかに黒龍江省公安庁档案課長イ・ソクチュ（朝鮮族）も，踏査団に文書資料を渡したことが文革時に「罪状」とされたという[62]。

踏査団の団員と変わりない形で踏査行程に同行して援助した延辺の朝鮮族幹部石東洙と姜渭龍の場合，金宇鍾とは異なる歩みをたどることになった。この2人は1960年代初めに北朝鮮に移ったことが確認できるのである。1962年夏，周恩来が延辺自治州を視察した際，州長の朱徳海は，2名の州党委員会委員（姜渭龍と石東洙）が朝鮮から高級の待遇を提示されて引き抜かれてしまい，「我々のところの高級知識人とトップクラスの俳優に対しても朝鮮は積極的に誘致している」と報告したといわれる[63]。

石東洙は1961年9月まで延辺自治州の副州長を務めた後，同月から州政治協商会議委員会の副主席になり1962年までその地位にいた[64]。他の副主席7名がいずれも1963年12月までの任期を全うしたのに対して，石は1962年のうちに副主席の地位を離れたということになる。他方で，朝鮮革命博物館（旧解放闘争博物館）が創立15年を迎えた1963年8月には，石東洙は同博物館館長の肩書で『労働新聞』（8月1日）に「朝鮮革命博物館創立15周年」と題する文章を書いている。これらのことから考えると，石は革命博物館が新たな建物で開館した1961年1月の時点ではまだ延辺にいたが，翌年に北朝鮮に移って，革命博物館館長を務めることになったということになろう。

『労働新聞』に掲載された石の文章は，1963年7月31日に開かれた博物館創立15周年記念会での報告として行なわれたものだったが，その中で，「朝鮮革命博物館は国内各地から〔中国〕東北一帯にいたる広範な地域で抗日武装闘争と関連した遺物，資料を，それに直接参加した革命闘士たちとそして広範な人民たちとの密接な連携の下に，体系的に発掘収集し，それを研究分析し，整理保存するうえで主体的立場を徹底して堅持し，科学性を徹底的に保証することに慎重な注意をめぐらせた」と述べている。この言葉には，1959年の踏査団などを中国側で支えたことに対する自負の気持ちが表われている。

石の後，1973年から革命博物館館長を務めたのは，踏査団団長を務めた朴永純であった。朴は，1960年代に党中央委員会部長，最高人民会議常任委員会副委員長などの要職を歴任した後，1973年2月から革命博物館館長となった[65]。朴永純が革命烈士陵

に埋葬されているのに対し，石東洙の死亡時期と埋葬場所は明らかにされておらず，『抗日パルチザン参加者たちの回想記』にも石の回想文は1編も掲載されていない[66]。石の経歴に何らかの問題があったからと思われる。延辺のある朝鮮族の証言では，「石東洙は延辺で副州長まで務めたが，〔1943年頃に〕帰順した問題で政治審査を受けることになるや，朝鮮に行った」[67]とされており，この「帰順」の疑惑が中国だけでなく北朝鮮でも問題となったのかもしれない。

延辺の朝鮮族幹部として踏査団を援助したもう一人の人物姜渭龍も，石東洙と同じ時期に北朝鮮に移ったようである。北朝鮮では少将の軍事称号を受け，社会安全省政治局副局長，水産省政治局長を務めた[68]。姜は『抗日パルチザン参加者たちの回想記』第11巻（1969年）以降に多数の文章を執筆している[69]。2001年1月3日死去，愛国烈士陵に埋葬され[70]，のちに革命烈士陵に移葬された。

パルチザン参加者として踏査団に同行したもう一人の崔鳳松に関しては，略歴などを知ることができないが，『抗日パルチザン参加者たちの回想記』第16巻，第20巻に回想文を執筆し，1972年2月9日に死去，愛国烈士陵に「抗日革命烈士」として埋葬されたことが知られる。石東洙，姜渭龍と同じく1960年代前半に北朝鮮に移ったと見られる。

吉林時代の金日成について証言した黄貴軒は，石東洙，姜渭龍からはずっと遅れて1980年代に北朝鮮に移り住んだ。1914年の生まれで，1927年金日成に会った時は吉林女子師範学校付属小学校5学年生だったという[71]。その後，長春，吉林，ソウルなどで勉学を続け，解放直前に中国共産党に加入し，延辺大学に長く勤務した。その間，1947年と1980年に北朝鮮を訪問して金日成に会った。そして1982年に息子・娘の4家族とともに北朝鮮に永久帰国し，金日成との出会いについていくつかの回想文を執筆した[72]。2001年1月14日死去し，愛国烈士陵に「反日愛国烈士」として埋葬された。

黄貴軒を除いて，石東洙らが1960年代初めに延辺から北朝鮮に移ったのは，当時の自治州における政治的な状況とも関連があると見られる。1950年代後半からの反右派闘争や大躍進政策など中国の政治的・経済的変動の中で延辺朝鮮族自治州で展開された「民族整風運動」によって，朝鮮民族としてのアイデンティティが否定的に扱われることに反発する気持ちが彼らにあったのではないだろうか。その一方で，踏査団の活動などを通じて北朝鮮の党・政府幹部と親しく接したことが一つのきっかけとなって，北朝鮮への移住を決断したのであろう。もちろん，その前提として解放までの期間，抗日パルチザンとしてたたかった歴史的体験を共有していたことが大きな要因となったことは

間違いない。さらには，自らのパルチザン活動の体験が広く認知されるには，中国にとどまるより北朝鮮に移り住むのがよいと判断したのではないかと思われる。

石東洙や姜渭龍が自らの決断の理由について何も述べていない以上，これらの事情は推測にとどまるしかないが，彼らの行動は北朝鮮と中国との歴史的関係の一面を表わすものであったことに注意しておきたい。

お　わ　り　に

1959年に北朝鮮から中国東北地方に派遣された抗日武装闘争戦跡地踏査団は，パルチザン参加者をはじめ画家，文学者などで構成されていた。それ以前の踏査団に比べると，規模が大きく，踏査期間も長いものであった。中国側の援助も受けた踏査団は，金日成をはじめとする抗日パルチザンの歴史に関わる資料を収集し，当時を知る人々から体験談を聞き取っただけでなく，パルチザンの苦難に満ちた歩みをも追体験することによって，パルチザンの歴史に「真実性」を付与するものとなった。収集された実物資料を含む関係資料や描かれた絵画などは，北朝鮮において展示され，さらには新たに開館した革命博物館の展示物として利用されることになった。踏査団団員によって執筆された文章は，各種の雑誌・新聞に掲載され，多くの人びとに読まれた。

こうして戦跡地踏査団は，『抗日パルチザン参加者たちの回想記』の刊行とともに，1950年代後半から1960年代前半の時期になされた「革命伝統」の定立において大きな役割を果たす事業であったと位置づけられる。

戦跡地踏査という点では，その後，同規模の踏査団が中国に派遣されることはなくなった[73]。その一方で1960年代以降，踏査団の行き先は朝鮮国内の「革命戦跡地」「革命史跡地」に変わることとなった。国内の白頭山地区などでの踏査活動は遺物を発掘し調査することを目的とするものというより，軍部隊，大衆団体，学校などの単位で組織される踏査団がパルチザン活動を追体験し，その精神を継承することに重点が置かれるものとなって，現在まで続いている。

1959年の踏査団に協力した中国側の朝鮮族幹部らの歩みは，解放前と解放後を通じて朝鮮と中国東北地方（とりわけ延辺地域）とが国境で分断されたものではなかったこと，そこに住む朝鮮人にとっては共通の歴史的体験をはぐくむ場所であったことを示している。もちろん国際関係の側面では，分断の力学が強く働いたことも間違いない。しかし，抗日パルチザンという歴史を前提とするなら，それを通じての共通の歴史的体験

を見出すことが可能であろう。また，人の移動にともなって，歴史的体験，歴史的知識・認識が転移したことも，彼ら／彼女らのケースから知ることができる。

以上のような意味において，1959 年の中国東北地方戦跡地踏査団は，北朝鮮における歴史認識の変遷と朝鮮・中国の歴史的関係を考える上で注目すべき出来事だったのである。

（付記）

本稿は，JSPS 科研費 20H01330 による成果である。

注

1）例えば，신주백「북한의 근현대 반침략 투쟁사 연구」한국역사연구회 북한 사학사연구반편『북한의 역사 만들기』서울：푸른역사，2003 년（辛珠栢「北韓の近現代反侵略闘争史研究」韓国歴史研究会北韓史学史研究班編『北韓の歴史づくり』ソウル，プルンヨクサ，2003 年）；조수룡「경합하는‘혁명전통’――북한 초기 역사학계의 민족해방운동사이해와 재구축――」『사학연구』제 137 집，2020 년（チョ・スリョン「競合する‘革命伝統’――北韓初期歴史学界の民族解放運動史理解と再構築――」『史学研究』第 137 輯，2020 年）。

2）조은희「역사적 기억의 정치적 활용：북한의 항일빨찌산참가자들의 회상기 분석을 중심으로」『통일과 평화』（서울대학교 통일평화연구원）제 4 집 제 2 호，2012 년（チョ・ウニ「歴史的記憶の政治的活用：北韓の抗日パルチザン参加者たちの回想記分析を中心に」『統一と平和』（ソウル大学校統一平和研究院）第 4 輯第 2 号，2012 年）。

3）1953 年と 1959 年の戦跡地踏査団に関しては次の論文が扱っているが，踏査団のメンバーなどを明らかにしておらず，叙述もあまり詳しくない。문미라「1950-1960 년대 북한의‘혁명전통’확립과정과 역사인식의 변화」『역사와 현실』제 119 호，2021 년（ムン・ミラ「1950-1960 年代北韓の‘革命伝統’確立過程と歴史認識の変化」『歴史と社会』第 119 号，2021 年）。

4）『항일무장투쟁 전적지를 찾아서』평양，조선로동당출판사，1960 년（『抗日武装闘争戦跡地を訪ねて』平壌，朝鮮労働党出版社，1960 年）。著者名は記されていないが，「まえがき」は「抗日武装闘争戦跡地踏査団」の名で書かれている。『로동신문』（労働新聞）2016 年 3 月 7 日の記事「《동지애의 노래》와 함께 영생하는 작가」（「《同志愛のうた》とともに永生する作家」）は，1959 年の「革命戦跡地踏査過程での取材と体験はリ・ジョンスン同志を興奮させ，彼をして『抗日武装闘争戦跡地を訪ねて』という図書を執筆編纂させた」と書いて，『戦跡地』の編著者が踏査団に参加した作家リ・ジョンスンであったことを明らかにしている。なお，本稿では，出版地が平壌である文献については出版地記載を省略する。

5）김우종 구술；류승주 엮음『재중 동포의 현대사：조선족 역사가 김우종의 생애』서울，선인，2019 년（金宇鍾口述；リュ・スンジュ編『在中同胞の現代史：朝鮮族歴史家金宇鍾の生涯』ソウル，ソニン，2019 年）。

6）박금일「중국 동북지방의 항일무장투쟁자료들을 발굴수집하기 위한 사업이 성과적으로 진행되도록 이끄신 위대한 김일성동지의 현명한 령도［주체35（1946）－주체48（1959）］」『력사과학』2019 년 제4 호。

7）パク論文7ページ。また，권미림「혁명전통교양의 거점을 마련하기 위한 우리당의 현명한 령도」『력사과학』2003 년제4 호（クォン・ミリム「革命伝統教養の拠点を築くための我が党の賢明な領導」『歴史科学』2003 年第4 号）などの論文でも同様の記述がなされている。

8）문학과사상연구회『한설야 문학의 재인식』서울，소명출판，2000 년，212 페지（文学と思想研究会『韓雪野文学の再認識』ソウル，ソミョン出版，2000 年，212 ページ）。ただし，根拠は示されていない。

9）『로동신문』（労働新聞）1956 年3 月9 日。리의하「（기록영화）김일성원수 항일유격전적지」『조선』제1 호，1956 년4 월，16-17 페지（リ・ウィハ「（記録映画）金日成元帥抗日遊撃戦跡地」『朝鮮』第1 号，1956 年4 月，16-17 ページ）。

10）「（과학계소식）김일성원수의 항일 유격 투쟁 전적지를 조사」『조선민주주의인민공화국과학원 학보』1954 년제3 호，169-172 페지（「（科学界消息）金日成元帥の抗日遊撃闘争戦跡地を調査」『朝鮮民主主義人民共和国科学院学報』1954 年第3 号，169-172 ページ）。以下の引用は，169 ページ，171 ページ，172 ページより。

11）송영『백두산은 어데서나 보인다：항일유격투쟁 전적지 조사에 참가하여』민주청년사，1956 년，316 페지（宋影『白頭山はどこからも望める：抗日遊撃闘争戦跡地調査に参加して』民主青年社，1956 年，316 ページ）。

12）「민족적량심을 귀중히 여겨준 은혜로운 품（작가 송영）」리경수『운명의 선택　2』평양출판사，2012 년，97-99 페지（「民族的良心を貴重なものと感じさせた恩恵深い懐（作家宋影）」リ・ギョンス『運命の選択2』平壌出版社，2012 年，97-99 ページ）。宋影はその後も踏査の体験にもとづいて，抗日革命闘争を描いた数々の文学作品を創作したとされる。

13）（日本語版）金日成『世紀とともに』第5 巻，外国文出版社，1994 年，104 ページ。

14）朴永純は1946 年に林春秋とともに中国東北地方に派遣され，そこに残っている抗日遊撃隊の2 世たちを北朝鮮に連れて帰り，1948 年には金日成の母康盤石の遺骸を持ち帰り，ピョンヤンの万景台に移葬したとされる。김광운『북한 정치사 연구Ⅰ』서울，선인，2003 년，537 페지（金光雲『北韓政治史研究Ⅰ』ソウル，ソニン，2003 年，537 ページ）。

15）文革時に作成された朱徳海批判の文書（延辺農学院東方紅公社‘窮地に落ちた仇を追撃する’戦闘隊「大売国逆賊，大特務朱徳海を打倒しよう！」）による。廉仁浩「조선족 해원 일기를 통해서 본 북한 항일빨치산 투쟁사 활용과 문혁기의‘석동수 특무 조직사

건’」『한국학논총』제 47 집，2017 년，376 페지（廉仁浩「朝鮮族海元日記を通してみた北韓抗日パルチザン闘争史活用と文革期の‘石東洙特務組織事件’」『韓国学論叢』第 47 輯，2017 年，376 ページ）より再引用。

16）この内閣命令は当時の『労働新聞』や『民主朝鮮』にも掲載されていないため，具体的な内容を知ることができないが，『백과전서』제 4 권（과학・백과사전출판사，1983 년，579 페지）（『百科全書』第 4 巻，科学・百科事典出版社，1983 年，579 ページ）の「朝鮮革命博物館」の項目では，次のように説明されている。「革命博物館は，1959 年にあった革命戦跡地と革命史跡地に対する第 2 次踏査事業と，敬愛する金日成同志の配慮によって採択された内閣命令第 14 号（1959 年 3 月）にしたがって拡張される朝鮮革命博物館の開館準備時期に組織進行した全国的な革命歴史資料発掘収集事業を通じて，その物質的・資料的土台をいっそう整備補強した」。この記述のうち，1959 年の踏査事業を「第 2 次」としているのは，1953 年の踏査を第 1 次と見なしているからであろう。『조선대백과사전』제 19 권，백과사전출판사，2000 년，90 페지（『朝鮮大百科事典』第 19 巻，百科事典出版社，2000 年，90 ページ）では，内閣命令第 14 号は 1959 年 2 月に出されたものとしている。

17）パク・クミル論文，9 ページ。踏査団収集資料展示会（後述）を紹介した『労働新聞』の記事でも踏査団の構成は同じように記されている。「우리 인민을 승리와 영광에로 고무하는 항일 무장 투쟁의 불멸의 사적」『로동신문』1959 년 11 월 30 일（「我が人民を勝利と栄光へと鼓舞する抗日武装闘争の不滅の史跡」『労働新聞』1959 年 11 月 30 日）。

18）踏査団に参加した姜孝淳は，踏査団は東北の 17 の県・市を踏査したが，「私は長白県だけを踏査した」と述べている。강효순「장백 20 도구의 인상」『청년문학』1960 년제 2 호，12 페지（姜孝淳「長白 20 道溝の印象」『青年文学』1960 年第 2 号，12 ページ）。

19）朴永純（1905～1987）朴英淳・朴永順などとも記されるが，金日成の回顧録（日本語版）では「朴永純」とされているので，それに従う（以下，パルチザン参加者の人名の漢字表記も同じ）。咸鏡北道鏡城生れ。1927 年から和龍県で革命闘争に参加，1931 年から党と武装組織に加わった。汪清県，長白山地区などで兵器製造・修理を担当し，〈延吉爆弾〉の製造にあたった。1940 年秋以降は，抗日連軍一路軍の成員としてソ連領内の B 野営に移った。解放後，清津などで活動し，「反党反革命分子を摘発暴露した」。1948 年朝鮮人民軍通信部長，1956 年労働党中央委員会通信部長，1962 年から逓信相を務め，党中央委員会部長，最高人民会議常任委員会副委員長などを歴任し，1973 年には朝鮮革命博物館長となった。革命烈士陵に墓と半身像があり，墓碑には「朝鮮人民革命軍指揮官」と刻まれている（主に，조선혁명박물관 제 1 학술연구부 집필『수령님과 혁명전우들』과학백과사전출판사，2010 년，154-161 페지（朝鮮革命博物館第一学術研究部執筆『首領さまと革命戦友たち』科学百科事典出版社，2010 年，154-161 ページ）による）。B 野営にいたことは，「東北抗聯第一路軍越境人員統計表（1943 年 2 月）」中共延辺州党委党史研究室編『東北地区朝鮮人革命闘争資料彙編』延吉，同研究室，2000 年，866 ページ。

20）문학수「항일 무장 투쟁 전적지 답사 일기 중에서」『조선미술』1960 년제 3 호，22 페지（文学洙「抗日武装闘争戦跡地踏査日記から」『朝鮮美術』1960 年第 3 号，22 ページ）。金宇鍾，前掲『재중 동포의 현대사』205 ページ。

21）党歴史研究所は，1957 年に党中央委員会直属機関として設置され，『金日成選集』や抗日武装闘争参加者の回想記，労働党史などを編集・刊行することを主な業務としており，現在に至っている。とりあえず，次の文献を参照。김경인「조선로동당 력사 연구소 사업에 관하여」『공산당 및 로동당들의 맑스－레닌주의 연구소，당력사연구소，당력사위원회 대표등의 제 3 차 국제회의 문헌집』조선로동당출판사，1959 년，346-350 페지（キム・ギョンイン「朝鮮労働党歴史研究所の事業に関して」『共産党および労働党などのマルクス・レーニン主義研究所，党歴史研究所，党歴史委員会代表たちの第 3 次国際会議文献集』朝鮮労働党出版社，1959 年，346-350 ページ）。

22）朝鮮側の文献には副団長の名前が記されていないが，中国の文献（前掲『金日成与張蔚華』119 ページ）では，「政治副団長は朝鮮労働党党史研究所指導員金泰浩だった」としている。金泰浩（1929～2003）は，1959 年党歴史研究所指導員，1985-97 年党歴史研究所副所長，1980 年 2 月当時社会科学院歴史研究所副所長，同年 4 月レーニン誕生 110 周年記念科学者討論会（モスクワ）に参加。1987 年 4 月金日成勲章受勲（中央日報社附設東西問題研究所編『北韓人名事典』서울，中央日報社，1990 年，改訂増補版，128 페지）。墓は愛国烈士陵にあり，「党中央委員会党歴史研究所副所長」と刻まれている。本稿で利用する愛国烈士陵のデータは，2012 年 5 月日朝友好京都ネットワーク訪朝団の歴史チーム（代表・水野直樹）の調査による。

23）革命烈士陵の墓碑では，李鳳洙（리봉수，1901～1967）は，1931 年革命に参加，1933 年「朝鮮人民革命軍入隊」とされ，李斗賛（리두찬，1916～1984）は，1932 年革命に参加，1933 年「朝鮮人民革命軍入隊」とされる。革命烈士陵のデータ（墓碑写真）は，김광운，前掲書，による。

24）曺道彦（조도언，1903～1985）は，生没年が一致することから愛国烈士陵に墓碑のあるチョ・ドゥオン（조두언）と同一人物と思われる。김광운，前掲書，127 ページによれば，チョ・ドゥオンは中国延吉県で成長後，1933 年に遊撃隊に入隊，中隊長にもなった。1941 年小部隊活動中に逮捕され，解放までソウルの西大門刑務所に収監されていた。北朝鮮の商業部門で働き，1948 年から人民軍で服務した。『抗日パルチザン参加者たちの回想記』第 1 巻に「煙集崗での凱歌」と題する回想文を書いたほか，第 2 巻，第 6 巻などにも回想文を執筆している。これら回想記では，「조도언」と記されている。

25）パク・スンホは，朴永純，姜渭龍ととも「闘士同志」として名前があげられている。황건「화가의 정성――항일 무장 투쟁 전적지 답사 미술 전람회를 보고」『조선미술』1962 년제 7 호，20 페지（黄健「画家の真心――抗日武装闘争戦跡地踏査美術展覧会を観て」『朝鮮美術』1962 年第 7 号，20 ページ。しかし，他の資料ではそれらしき人物を確認することができないため，略歴などは不明である。姜渭龍と同じく中国側で参加した人物かもしれない。

26）정관철，문학수「2 인전을 가지면서」『조선미술』1962 년제 7 호，11 페지（鄭寛徹・文学洙「二人展を開いて」『朝鮮美術』1962 年第 7 号，11 ページ）。

27）姜孝淳と黄健は，『朝鮮美術』1962 年第 7 号に書いた戦跡地踏査絵画作品展覧会の観覧記で，自らが踏査団の団員であったと書いている。

28）황건，전게「화가의 정성――항일 무장 투쟁 전적지 답사 미술 전람회를 보고」20 페지。

29）リ・ジョンスンは，抗日パルチザン時期の金日成を主人公とする映画『朝鮮の星』10 部作（1980 年～1987 年）の脚本家として知られ，愛国烈士陵の墓碑には「1921 年 10 月 14 日－1997 年 11 月 2 日　映画人同盟中央委員会委員長」と刻まれている。1959 年当時の北朝鮮には，同じリ・ジョンスン（리종순）という名前の映画俳優（女性）もいたが，踏査団に参加したのは文学者のリ・ジョンスンだったと見られる。なお，注 4）を参照のこと。

30）「김일성원수 항일유격전적지를 찾아서」『아동문학』1959 년 12 월，20 페지（(座談会)「金日成元帥抗日遊撃戦跡地を訪ねて」『児童文学』1959 年 12 月，20 ページ）。出席者は，姜孝淳，朴雄傑，リ・ジョンスン，ミン・ビョンギュン。

31）「희사즈거우 밀영지를 찾아서」『문학신문』1959 년 12 월 11 일（「睹子溝密営地を訪ねて」『文学新聞』1959 年 12 月 11 日），「장백을 무대로 하여」『문학신문』1960 년 6 월 3 일（「長白を舞台にして」『文学新聞』1960 年 6 月 3 日）。

32）金泰浩も歴史研究者というより党幹部だったと思われる。

33）석동수「(항일빨찌산 참가자들의 회상기 중에서）군민 일치의 혁명적 기풍을 견지하여」『로동신문』1968 년 6 월 16 일（石東洙「(抗日パルチザン参加者たちの回想記から）軍民一致の革命的気風を堅持して」『労働新聞』1968 年 6 月 16 日）。

34）《중국조선민족발자취총서》편집위원회편『중국조선민족발자취총서（5）승리』북경，민족출판사，1992 년，143 페지（《中国朝鮮民族足跡叢書》編集委員会編『中国朝鮮族足跡叢書（5）勝利』北京，民族出版社，1992 年，143 ページ）。

35）朴文一・孫東植主編『延辺大学校史　1949-2004』延吉，延辺大学出版社，2004 年，675 ページ。中共延辺州委組織部ほか編『中国共産党吉林省延辺朝鮮族自治州組織史資料（1928～1987)』延吉，出版社不明，1991 年，193 ページ。

36）中共延辺州委組織部ほか編『吉林省延辺朝鮮族自治州政軍統群系統組織史資料（1949～1987)』延吉，出版社・出版年不明，32 ページ。

37）同前『吉林省延辺朝鮮族自治州政軍統群系統組織史資料（1949～1987)』244 ページ。

38）前掲『中国共産党吉林省延辺朝鮮族自治州組織史資料（1928～1987)』174 ページ。26 名の委員には朱徳海，石東洙らもいた。

39）姜渭龍は 1954 年に北朝鮮側に「金日成元帥抗日パルチザン部隊が使用した出版道具（1932～1936)」を送ったとされる。「슬기로운 혁명전통이여 길이 빛나라」『인민조선』1959 년 11 월，3 페지（「優れた革命伝統よ，永く輝け」『人民朝鮮』1959 年 11 月，3 ページ）。

40）執筆時期が最も早いのは，최봉송「그이의 가르침을 받들고」「끝까지 혁명 절개를 지켜」『혁명 선렬들의 생애와 활동2』조선로동당출판사，1965년（崔鳳松「その方の教えを奉じて」「最後まで革命気概を守って」『革命先烈たちの生涯と活動2』朝鮮労働党出版社，1965年）。前者は『労働新聞』1965年10月1日付に転載された。

41）黄貴軒は，1949年に延辺大学が創立された時，57名の教員のうちの1人であり，その後も同校校務委員会委員になるなど，延辺大学の運営・教育にそれなりの役割を果たしたと見られる。前掲『延辺大学校史　1949-2004』14ページ，127ページ。『戦跡地』（26ページ）にも「延辺大学で教鞭をとっている」と記されている。

42）『로동신문』1985년6월5일（『労働新聞』1985年6月5日）。

43）송영，전게서，26페지。

44）前掲『金日成与張蔚華』121ページ。

45）황건「영광의 발자욱을 더듬어」『조선』1960년제4호，3페지（黄健「栄光の足跡をたどって」『朝鮮』1960年第4号，3ページ）。

46）문학수「불멸의 형상을 창조하면서」『조선미술』1961년제9호，13페지（文学洙「不滅の形象を創造しながら」『朝鮮美術』1961年第9号，13ページ）。

47）문학수「항일 무장 투쟁 전적지 답사 일기 중에서」『조선미술』1960년제3호，1960년4호（文学洙「抗日武装闘争戦跡地踏査日記から」『朝鮮美術』1960年第3号，1960年第4号）。

48）『戦跡地』に付けられた「踏査路程図」には踏査のコースは記されているが，日程の表示がないので，日付は文学洙の日記によることにする。

49）리종순「라자구 전투 전적지를 찾아서」『로동신문』1962년6월29일（リ・ジョンスン「羅子溝戦闘戦跡地を訪ねて」『労働新聞』1962年6月29日）。

50）황건，전게「영광의 발자욱을 더듬어」3페지（黄健，前掲「栄光の足跡をたどって」3ページ）に掲載された写真による。『戦跡地』78ページの後にも同じ写真が収録されている。

51）前掲『金日成与張蔚華』122-123ページ。

52）同前『金日成与張蔚華』123-125ページ。踏査団が平壌を出発する前，団長と副団長は金日成首相の執務室に呼ばれて，金日成が撫松でともに活動した張蔚華の遺族を探すよう指示を受けていた（『世紀とともに』第4巻，日本語版，414-415ページ）。

53）리종순「빨찌산이 들렸던 마을에서」『청년문학』1960년 제10호，3페지（リ・ジョンスン「パルチザンが入った村で」『青年文学』1960年第10号，3ページ）。

54）김우종，전게『재중 동포의 현대사』204쪽（金宇鍾，前掲『在中同胞の現代史』204ページ）。

55）같은 책，205페지（同前，205ページ）。

56）같은 책，206페지（同前，206ページ）。

57）같은 책，204-206페지（同前，204-206ページ）。

58）석동수「밀림의 로인을 회억한다」『연변문학』1960년 제9호，20-21페지（石東洙

「密林の老人を回憶する」『延辺文学』1960 年第 9 号，20-21 ページ)。

59) 김우종 주편『우의의 장정』牡丹江，黒龍江朝鮮民族出版社，2002 년，55 페지（金宇鍾主編『友誼の長征』牡丹江，黒龍江朝鮮民族出版社，2002 年，55 ページ)。同書は，抗日パルチザン時期の朝鮮人・中国人の間の「友誼」を記した回想文などを収録している。黒龍江省寧安の住民メン・ソンボク（맹성복，漢族とみられる）が金日成らの部隊について語った記録も収録されており，「1959 年 6 月の口述記録を整理したもの」と注記されている（同書，135 페지)。これも，口述の時期から見て踏査団が聞き取ったものであろう。

60)『解放后四年間의　国内外重要日誌　1945.8-1949.3（増補版)』평양，民主朝鮮社，1949 年，237 페지。

61) 1974 年日本語版は，朝鮮革命博物館写真帳編集委員会編・訳『朝鮮革命博物館』東京，未来社，1974 年。

62) 김우종，전게『재중 동포의 현대사』206-213 페지（金宇鍾，前掲『在中同胞の現代史』206-213 ページ)。

63) 沈志華著，朱建栄訳『最後の天朝』岩波書店，2016 年，下巻 103 ページ。

64) 前掲『吉林省延辺朝鮮族自治州政軍統群系統組織史資料（1949～1987)』32-34 ページ，278 ページ。

65) 전게『수령님과 혁명전우들』160 페지（前掲『首領さまと革命戦友たち』160 ページ)。

66) ただし，注 33）に記したように，『労働新聞』1968 年 6 月 16 日付には，「(抗日パルチザン参加者たちの回想記）軍民一致の革命的気風を堅持して」と題する石東洙の回想記が掲載されている。1941 年頃の小部隊活動を回想した文章である。

67) 류연산『류연산 그가 만난 사람들』북경，민족출판사，2013 년，100 페지（柳然山『柳然山　彼が会った人びと』北京，民族出版社，2013 年，100 ページ)。

68)「은혜로운 태양의 품속에서――항일혁명투사 강위룡동지가 받아안은 크나큰 영광과 고귀한 은정」『로동신문』2008 년 12 월 6 일（「恩恵深い太陽の懐で――抗日革命闘士姜渭龍同志が受けた大きな栄光と高貴な恩情」『労働新聞』2008 年 12 月 6 日)。

69) 回想記への執筆は，11 巻に 2 編，12 巻に 2 編，13 巻に 2 編，14 巻に 2 編，16 巻に 2 編，17 巻に 2 編，18 巻に 2 編となっている。なお，第 20 巻まで刊行された『抗日パルチザン参加者たちの回想記』は，우리 민족끼리（我が民族同士）のサイトで閲覧できる。http://www.uriminzokkiri.com/

70) 김광운，앞의책，798 페지（金光雲，前掲書，798 ページ)。

71)「반세기의 세월이 흘렀어도」『로동신문』1985 년 6 월 5 일（「半世紀の歳月が流れても」『労働新聞』1985 年 6 月 5 日)。

72) 황귀헌「공산주의청년운동의 력사적 뿌리가 마련되던 나날을 회상하여」『로동신문』1982 년 8 월 27 일（黄貴軒「共産主義青年運動の歴史的根源が準備されていた日々を回想して」『労働新聞』1982 年 8 月 27 日)。황귀헌「은혜로운 불빛우러르며」『천리마』

1984년 4호，30페지（黄貴軒「恩恵深い灯を仰いで」『千里馬』1984年第4号，30ページ）など。前者は，『인민의 자유와 해방을 위하여（6)』조선로동당출판사，1988년（『人民の自由と解放のために（6)』朝鮮労働党出版社，1988年）に再録された。

73）パク・クミル論文も1960年代以降の踏査団については触れていないが，画家パク・チンス（박친수）は1984年10月3日－12月18日の中国東北地方戦跡地踏査団の一員として派遣され，同じく画家のチェ・チャンソン（최창성）は同踏査団を引率したとされている（리재현『조선력대미술가편람（증보판)』문학예술종합출판사，1999년，563페지，575페지（リ・ジェヒョン『朝鮮歴代美術家便覧（増補版)』文学芸術総合出版社，1999年，563ページ，575ページ）ので，踏査団の派遣は1959年で終わったわけではないようである。ただし，これらの踏査団の詳細は不明である。

（第20期第6研究会による成果）